

令和4年 4月9日

言葉の処方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 P64

## 自分を見ないという生き方もある

他者に関心を持ち、しばし自分を忘れると、むしろ自分のなすべきことが見えてきます

自分の心を直視しなさい、自分を客観的に見つめなさい、とはよく言われることです。実際に、人は苦境に陥ったとき、自分を深く見つめ、自省することで、苦境から脱することを学んできたのではないのでしょうか。

でも、自分を見ないという生き方もあるのです。自分を放っておくとも言えるのでしょうか。

「明日で世界が終わるとしても、今日りんごの木を植える」という生き方があります。それは、自分という些細な存在ばかり見つめることより、周囲を見通した大局観で他者に関心を持ち、自分の使命を見出そうとする生き方だと私は理解しています。真に高貴な生き方と言っていいと思います。

つきつめて言えば、自分の命にさえ無頓着であるというか、気にもかけていないというか、そんな感覚でしょうか。かといって、無理やり達観した感じでもありません。本能を理性で押さえつけようともしていません。実に哲学的で、希望から発動する行為です。

でも、なぜ、そんなことが可能なのでしょうか。実際にできるのでしょうか。

この言葉に呼応して、私は、1972年ローマ教皇パウロ6世により、ヴァチカンの黙想指導に招かれたモーリス・ズンデル司教の言葉を思い浮かべます。

「自分を放っておくこと、自分に構わないこと、自分を改善するためにでさえ自分を眺めないことである」(『沈黙を聴く』福岡カルメル会編訳)

この言葉の中に生きるヒントがあります。

病気になってしまったことをはじめ、自分ではコントロールできないことが人生にはたくさんあります。そんなことに一喜一憂していても意味はありません。だから、悩みを抱える自分のことは放っておくのです。これまで自分のことを人生の8割考えていたのなら、それを4割にすれば、その分、他者について考える時間を増やすことができます。ではありませんか。

群馬県の病院に入院している末期がんの患者さんの家族から予約が入り、病室でがん哲学外来をしたことがあります。70代の男性でした。

寝たきりの状態で、か細い声で「死を待つばかりの私ですが、こんな私にもできることはあるのでしょうか」と私に尋ねました。

私はしばし考えて、言いました。

「お孫さんに内村鑑三の本『代表的日本人』をプレゼントしたらいかがですか」内村は群馬県の出身です。この患者さんも子どものころから、その名を郷土の偉人として教え込まれてきたことでしょう。親しみのある偉人に違いありません。

すると、患者さんはほほえみを浮かべて、「ああ、それはいい。そうします」と言いました。かすかなほほえみでしたが、確かな役割をつかんだ安心のほほえみでした。

私は、言葉を続けました。

「自分を見ないという生き方もありますよ」

がんの痛みや死に向かう不安、今置かれている自分自身のことを構わず、いつそのことは、放っておくのです。その間、孫や家族、あるいは日々接している医療スタッフに思いをさせてみる。相手に対して何ができるというだけそれなことではなく、思いを寄せるだけでも気持ちがやわらぐはずです。

「先生、人は言葉でこんなにも癒されるのですね」

ささやくような声を聞いて、私は、どんな状況にあっても人は学びの時を得るということに感動を覚えました。

その後しばらくして、この老人の家族が、涙ぐみながら報告してくれました。「主人は、先生とお会いしてから間もなく亡くなりましたが、先生の言うとおり5人の孫に、内村鑑三の本を贈りました。そして、安らかに息を引き取りました」

実際に、孫がその本を読むのはずっとあとのことでしょう。すぐに読めるほど簡単な本ではないからです。でも、祖父が死の床からも最後のプレゼントをしたことは、孫の心にずっと刻み込まれていくことでしょう。

人は最後まで使命感とともに生きるという、最高の生き方を示すお手本でもあるのですから――。

次回 5月14日(土)  
区民ひろば清和第一  
13時30分より

主催 岡倉天心記念 がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」  
後援 一般社団法人がん哲学外来